

総合教育会議会議録

会議の名称	第7回 総合教育会議
開催日時	平成 30 年 10 月 31 日 (水) 午後 3 時 30 分開会 ・ 午後 4 時 35 分開会
開催場所	上三川町庁舎 4 階 各種委員会室
議長 (委員長・会長等) の氏名	町長 星野 光利
出席者 (委員等) の氏名・出席者数	星野光利 町長 森田良司 教育長 櫻井定一 教育長職務代理者 吉田由美 教育委員 関 美恵 教育委員 出席者 5 名
欠席者 (委員等) の氏名・欠席者数	清水智生 教育委員 欠席者 1 名
事務局職員等出席者の職・氏名	総務課長 田中 文雄 総務課長補佐 大山 光夫 総務課秘書庶務係長 保坂 武志 生涯学習課長 星野 光弘 生涯学習課長補佐 深谷 昇 教育総務課長 枝 淑子 教育総務課長補佐 青柳 政克 教育総務課長補佐兼指導主事 上岡 尚子
会議次第	議 事 本町における外国語教育について
配布資料	資料 1 (参考) 諸外国における外国語教育の状況 資料 2 新たな英語教育の在り方実現のための体制整備 資料 3 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール 資料 4 外国語教育の抜本的強化のイメージ 資料 5 上三川町の外国語教育の現状 資料 6 上三川町 ★グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール 資料 7 英語検定受検料助成を検討

発 言 内 容

【町長】 定刻になりましたので、今から第7回の総合教育会議を始めさせていただきます。進行につきましては、会議の主催者であります私が務めさせていただきます。

今年1回目の総合教育会議であります。今回は「本町における外国語教育について」を議題といたします。本町でも平成32年、2020年度からの新学習指導要領が全面実施されることに伴いまして、小学5・6年生が教科外国語として年間70時間、小学3・4年生が外国語活動を年間35時間実施することとなります。今後、本町でも外国語教育を進めることとなりますが、準備しなければならない環境整備等を自由にご協議いただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

それでは、早速議事に入らせていただきます。「本町における外国語教育について」ということで、まず、本町の現状等を把握した上で、今後の進め方についてご協議いただこうと思っております。

それでは、背景、現状等について、事務局から説明をお願いします。

【事務局(上岡)】 それでは、資料1をご覧ください。現在、グローバル化が加速し、情報通信や交通分野での技術革新により、人々の生活圏も広がっております。また、アジアを初めとする、いわゆる新興国が急速に経済成長し、国際社会における存在感を増しているところです。

諸外国における外国語教育の状況でございますけれども、現在、日本の外国語教育につきましては、近隣のアジア諸国と比較いたしますと、初等教育段階における外国語の導入は約10年遅れ、韓国とは14年遅れで導入されているようなことがわかります。また、外国語の開始学年についても、小学校高学年から週1コマとなっており、授業時数につきましても他のアジア諸国より少ないことがわかります。

資料2をご覧ください。そこで、文部科学省では2013年度から新たな英語教育のあり方実現のための体制整備を進めてまいりました。小学校においては高学年における外国語の教科化や、中学年からの外国語活動の開始に向けての研修を行い、指導体制の強化を図っております。

中高等学校におきましては、小学校における英語教育の高度化に伴い、中高等学校における英語教育の目標、内容も高度化するため、中学校において授業を基本的に英語で行うことなどが挙げられております。その他、外部人材の活用促進、指導用教材等の開発、教

員養成課程、採用の改善・充実などが主な施策として掲げられております。

資料3をご覧ください。資料2を時系列でより具体的に示した国のスケジュールとなります。国では、2020年東京オリンピック・パラリンピックを1つの目安として改革が進められております。本年度、2018年度を見ていただきますと、小学校において新教材を使用し、新学習指導要領に向けて移行措置を行っているところです。

また、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には、小学校において新学習指導要領が全面実施となります。さらに、現在、移行期間中は新教材を活用しながら授業を行っておりますが、2020年度から小学校5・6年生は教科書を使用した授業が開始となります。

資料4をご覧ください。こちらは、外国語教育の抜本的強化のイメージとなります。左側の現状のところをごらんください。全体的には、学年が上がるにつれて意欲に課題があることや、学校種間の接続が不十分であるというような課題が挙げられております。以下には、それぞれの学校種での実態が挙げられております。

続いて、右側の新たな外国語教育をごらんください。そちらに示されておりますように、今回の改訂により何ができるようになるかという観点から、国際基準CEFRを参考に、小中高等学校を通じた5つの領域、聞くこと、読むこと、話すこと、発表、書くこと为目标が設定されました。また、小学校5・6年生は教科として週2コマ程度、3・4年生は外国語活動として週1コマ程度、外国語を学習することとなります。

参考資料1をご覧ください。こちら、中ほどに生徒の英語力に関する目標設定が掲げられております。中学校卒業段階では英検3級程度以上、CEFR・A1が、29年度から32年度は50%の達成率、34年度には60%、36年度には70%と設定されております。また、次年度は全国学力学習状況調査において初めて英語が実施される予定となっております。

先ほどから申し上げておりますCEFRについてですが、こちらは、欧州評議会が示す外国語の学習や教授のためのヨーロッパ共通の参照枠のことを言い、資料4、先ほど説明しましたこちらの左側にありますように、中学校卒業程度の英検3級程度をA1、そして高等学校卒業程度の英検準2級から2級程度以上がA2からB1というような共通の物差しとなっております。こちらにつきましては、参考資料に詳しくまとめてありますので、後ほどご欄いただければと思います。

以上が、国の進めている外国語教育についての概要となります。

【町長】 それでは、今回の議題とした背景、本町の現状等が、今、説明ありました。皆様からご意見等がありましたらお伺いたします。

事務局から補足があれば。

【事務局(上岡)】 上三川の現状についても全部お話したほうがよろしいですか。

【町長】 そうですね。

【事務局(上岡)】 それでしたら、今の説明は国のほうでしたので。

【町長】 では、続けてお願いします。

【事務局(上岡)】 よろしいですか。

では、続きまして上三川町の外国語教育についての概要についてご説明をいたします。

資料5をご覧ください。上三川町の現状でございますが、まず、町においては本郷北小学校が平成19年度から2年間、文部科学省より外国語活動等の研究指定校として指定を受け、研究に取り組み、その成果を町内外に発表し、共有してきたという経緯がございます。それらの研究成果を踏まえまして、町内小学校においては、5・6年生で実施する外国語活動を予備時数を活用することにより、これまでも小学校1年生から実施をして成果を挙げているところでございます。また、外部人材の活用促進といたしまして、本年度からはALTを2名増員させていただき、7名体制で指導させていただいております。

町内の小学校では、全ての外国語活動の時間にALTが配置されるという大変恵まれた環境の中で外国語活動が行われております。また、広く外国語に親しんでいただけるよう、中央公民館で夏休みに行われます、エンジョイ英会話きつずや、東館南集会所での夏休み子どもふれあい教室の英語活動など、生涯学習事業にも協力し、大変好評をいただいているところでございます。

続きまして、上三川町の外国語教育の課題について、英語教育実施調査の中からお伝えしたいと思います。平成29年度の英語教育実施状況調査においては、英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合は、全国と上三川町、ともに40.7%という同等の結果でした。さらに、3級以上を取得している生徒に限定してみると、全国が22.0%に対しまして上三川町は31.4%と、全国を10ポイント近く上回る結果となっております。英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒の割合と、実際に英検3級以上を取得している生徒の割合の差が、約10%以上あるということも注目すべき点であります。

続きまして、資料6をご覧ください。以上のように、国の施策や町の実態を踏まえまし

て、本町では英語教育改革実施計画をもとに、英語教育の一層の推進を進めております。特に今年度は、英語授業力アップ研修や、英語検定料助成調査研究などに力を入れているところでございます。

その中の英語検定料助成調査研究について、もう少し詳しくお伝えしたいと思います。

資料7をごらんください。先ほどからお伝えしておりますように、生徒の英語力の目標値でございますが、英検3級以上を達成した割合が50%以上となっており、町の生徒の実態につきましては以下のとおりになっております。課題としましては、先ほども申し上げましたが、3級程度以上の力を持っていても、実際、検定を受験するまでに至らない生徒もいるということでございます。また、国では英語力の評価に民間資格、検定試験の活用が促進され、今後、大学入学共通テストにおいても、英語の試験が、民間資格、検定試験に一本化されていくような計画があります。

さらに、次年度の全国学力学習状況調査では英語が初めて実施され、今までの高校入試等のテストと大きく変わるのは、英語の4技能の学力調査となるということです。特に、話すということが調査されるということが大きな特徴となってきます。なかなか中学校の定期テスト等の中では、話すということについて把握することは難しいことであるかと思えます。

そこで、英語検定合格の目標達成の過程の中で英語力を向上させることも、町の将来を担う人材育成のためには意義のあることと考え、英語検定料助成について、現在、調査研究を進めているところであります。

グローバル化に対応した英語力の向上は、今後もますます重要と考えております。英語教育改革実施計画や、社会教育の生涯学習事業などを中核に、まちづくりの大きな枠組みの中でも、本町の英語教育を進めていきたいと考えております。

以上で説明を終わらせていただきます。

【町長】 それでは、皆様からご意見等を伺います。

【教育長】 最初に、英語教育というと何か難しそうなテーマで、私自身も言葉に詰まる部分もあるのでありますが、内容自体は英語教育の専門家会議とは違いますので、専門的な視点にとらわれず、町民の皆さん、まさに保護者の皆様の目線で、資料にとらわれず意見交換ができるといいかなという気がしております。

先ほど、グローバル化の中でということが説明の中にありましたけれども、かつて、何十年前前は英語が特別な人が外交官になるとか、商社マンになるとか、あるいは外国で何

か仕事をするというような人が必要とされていたのでしょうかけれども、現状を見てみますと、日常生活の中でちょっとした英語力が必要な場面が見受けられるのかなど。職場にしても地域社会にしても、いろんな場面でそのようなことが見受けられる。英語圏の人とのコミュニケーション以外でも、例えば中国の方とコミュニケーションするとき、ドイツ人とコミュニケーションするときも、ドイツ語を話せなくても多少の英語力があれば英語の形にしてコミュニケーションが図れるようなところも。私たちの日常生活の中でかなり英語を使う場面、使わざるを得ない場面が増えてきているのかなというふうな感じがしております。

昔は、読み書きそろばんという言葉がありましたけれども、今は読み書き、ちょっとした英会話、あるいはタブレットなんかも、どんな仕事をやるにしてもかなり必要の度合いが増えていますし、英語についても、どのような職業であっても求められている時代のかなど。そんなことを踏まえながら、専門性はあまり高く掲げずに話ができたらいいかなと感じております。

【町長】 それを踏まえて、ご意見ございますか。

【櫻井教育長職務代理】 資料7の英語検定料の助成の検討ということで、本町は何人ぐらいの生徒さんが受験をされる見込みというか、全員対象ということではないのですかね。

【事務局(上岡)】 一応、中学生が対象で年1回3級程度を受験したいというお子さんについて助成をできるようにということで考えているところです。ですので、何割ということは、今まで受験してきた数があるのでそれをもとに算出をして、予算等を考えているんですけれども、予定では、中学校の対象の方には受けていただけるような形で考えているところでございます。

【櫻井教育長職務代理】 全生徒さんが試験を受けるために必要な予算ですね、出していただければ一番いいことでしょうけどね。できればそういう方向で、行っていただければいいかなと思いますね。

【教育長】 よろしいですか。現状で、今、事務局のほうで検討しているのは3級以上ということで検討しておりますけれども、中学生の全生徒というよりも3級を受ける生徒は、現状見てみますと少なくなってくるのではないかと思います。

【町長】 よろしいですか。ほかにございませんか。

【関委員】 やはり話せるようになりたいというのは、子供たちも一番あると思います。

私は、大阪のことを引き合いに出してしまうのですが、毎年大阪に帰省している関係があって、御堂筋や、大きい百貨店もあるんですけども、今、そういったところで販売員をされている方、英語、中国語が標準なんです。非常に中国の富裕層の方がいらっしゃるのじゃべられているんですけど、しゃべれない私達みたいな方は商品の品出し等で、接客はできないんですよ。これは本当に早い速度で進んでいて、デパートの地下の化粧品売場の女性なんかはもう全てしゃべれるんですよ。私も子供を連れて行くと、ああ、外国語って使うんだねって、当たり前ですけど。ここら辺にいと使う機会が、正直、必要性もそんなにないんです、授業中以外は。よほど自分で意識的に話しかける、そういう子はしゃべれるようになると思います。でも、一般的にそういうのを目にしない子がほとんどだと思うんです。

でも、実際に世間、世の中はそういうふうに進んでいます。私たちの子供が、ここから10年、15年たったときに、この世の中がどうなっているかということのを少し想像していただくと、本当に英語教育って大事で、隣の方がもしかしたら外国籍だとか、これは当たり前になると思うんですよ。そうなったときに、私たちは自分の意見を言うときに英語がベースになるかもしれないというところを捉えながら、こういった英語教育を見ていく必要があるかなというのを。都市部の速度がほんとうに速いです。外国籍の方もたくさんいて、町の呼び込みの声が日本語ではなくなっているんですよ。非常にびっくりするんですよ。あれ、日本にいたはずだよなって思うぐらいに、毎年毎年、変化が激しいです。ということを知って子供たちが学ぶ、そして、言語が必要があることなんだということのをどこかで感じ取って学んだら、きっと話すということがほんとうに大事で、将来、自分たちの職にもつながっていくということを感じられるじゃないのかなというのを感じて、そういうことを強く、ここ二、三年、ものすごくスピードが速いです。そういうのを感じています。

【櫻井教育長職務代理】 私も上三川から出たことがないので、外の様子が正直わからないということがあって、必要性というのは、英検3級取りました、目標達成しました、じゃあ、どうするの、何に使うのみみたいな、さっきの話じゃないですが。

逆に、先日テレビで、ロシアに75年、戦前からいろんな経緯で75年住まなくてはならなくなってしまった老人がいて、その方は、今、日本語が思い出せないと言っていました。というのは、必要に応じて、必要があって、周りが全部ロシア語だったりすると、必然的にロシア語になってしまう、覚える。やっぱり必然性が、上三川町も、どこか子供教

室に行くのと、あそこは英語しか……。

【関委員】 環境ですね。

【櫻井教育長職務代理】 どこにしても。むかしなつかし館に行くのと英語でいろいろなものを売ってるよとか、必要性がないとなかなか。取りました、じゃあどうするのみたいなことになってしまうので、生かせる場とか、取ったらご褒美、ご褒美というのは大学受験の資格の一部にもなっているとか、それはご褒美になっているのかもしれないけれど、そういう意味で、取りたい、それがないと自分のなりたい職業、パイロットになれないとか、そういった必然性が欲しい。もっとその辺のところをアピールしてほしいという感じがします。

【教育長】 確かに必然性があれば否応なく話せるようにはなるんだと思うんですね。やはり、私たちがいろいろ環境を整えていくことを考えると、必然性の前に、英語を学ぶ場、英語を活用する場を用意しておいてやることも行政の仕事なのかなということも。資料にもありましたように、いろんなところで、公民館でも、あるいは図書館でも、あるいは夏休み子どもふれあい教室などでも英語の活動を取り入れている。そういうものをだんだん広げていくといいかなと。放課後子ども教室などでも、多少英語活動なども取り入れているようなことをお聞きしましたが、そういう環境を整えていくことが必要なのかなと思います。

また、必要性ということを考えると、最近ではスーパーなどに行ってもいろんな外国の方をたくさん見かける。上三川でもそうですし、いろんな方が、私たちの周りに外国の方がたくさんいらっしゃる。そういう方々とコミュニケーションをとる必要というのは、これからますます増えてくるのではないかと思います。そのためにも環境を整えて、子供たちのために環境を整えておくことは大切じゃないかと思っております。

【町長】 吉田委員。

【吉田委員】 上三川町で今年度からALTの先生が2名増員されたということで、子供たちの英語活動、外国語活動に対しての行政側の配慮がすごく目に見える形で、成果につながっていけばという思いがあるんですが、やはり先ほど教育長がおっしゃいましたように、まちの中を、買い物にしろ、駅に行くにしろ、外国の方をお見受けする機会が増えていますので、やはりそういうところでコミュニケーションをとるためには、話すのがまずできないとコミュニケーションがとりづらいという場になるかと思うので、やはり話すということは一番重要なポイントになるかと思います。

私たち、過去の話なんですけど、やはり文法から英語を習ってしまったせいか、どうしても英語が苦手な分野になってしまいましたので、小学校1年生から外国語活動に取り組むということで、まず英語になれ親しむ、楽しんで英語ができるという環境を整えることから、徐々に授業に移行していける形がいいのかなと思っております。

【教育長】 確かに、これまでの学校での勉強は、話せなくても何とか通用してきましたというか、実態としてそういうところがあるんですけども、資料の中にもありましたように、日本の外国語、英語教育の課題として、やはり話す力が弱いというのが明確になってきている。そこを何とかしていかなきゃならないというのが、今のさまざまな施策なんじゃないかなというふうに思います。ですから、来年度の全国学力学習状況調査なども英語が取り入れられて、その中で話すというような、これはパソコンを通して話す力を確認するらしいんですけども、いろんな場面で話すことの必要性が求められているのかなと思いますね。

【櫻井教育長職務代理】 早く勉強しないとAIが進んじゃって、自動翻訳が進んじゃって、勉強しなくてもよかったのかみたいな話になっちゃうとまずくなっちゃうね。

さっき言ったデパートで英語で話している人がいたりして、そういったところで何を話しているんだろうとか、あの商品のことをどんなふうにといい、そういう興味がわくとか、そういった形で覚え始めたら、覚えやすい、話をしたくなっちゃうのかなという気はしますけどね。

【関委員】 小学生の低学年の子で、ALTの授業はどうって聞くと、楽しいと。必ず楽しいという言葉が出てきて、私たち、教えられてスタートではなく、楽しんでいる子たちは、町のALTの先生方が入っていただいたりしてることで、楽しいというベースができていのではないかと。また、高学年に行くとなんか興味を持つ子とか、多分、だんだん、中学校に行くとなんか勉強に入る、そこの狭間もまた難しい状況なのではないかなというのが、高学年の子たちなんかを見ていると、ただ話すだけじゃなくて、もうちょっと何かしてみたいなものを何となく感じるの、やはりすごく吸収力がいいですし、興味を持っているこの時期に何をしてあげるかもすごく大事ですし、使うための言葉だということが、私たちは受験のためのものというスタートがあったと思うんですけどね。そこの違いを子供も感じているということがすごく大きいなと。町のALTの先生を入れてくださったことで、子供たちが楽しんでスタートしているというのはすごくありがたいなと思います。

【教育長】 今、スマホなんかでもアプリで、日本語で話すと英語に翻訳したりという

アプリが出回っているようではすけれども、あれは大人にとって必要なんですよ。大人はそういうものがないと何とも対応できない。私なんか、あれば便利だと思う方ですけれども、子供は、それは期待していないと思うんですね。自分で自分の伝えたいことを伝えられるというところに、私なんか、大人よりも先に、子供の願いというのは行っているんじゃないかと思えますね。

だから、文法ではなくて自分の思いを相手に伝えるというようなこと、それはスマホのアプリの翻訳を待っているほど子供たちは気が長くないと思うんです。そういうことで、子供たちのために環境と整えていくということが、これからの子供たちに必要かなという気がいたしますね。

【町長】 私から質問いいですか。先ほどの現状の説明の中で、上三川町は3級以上の取得などの数字が全国から比べても非常によいという数字が出ていますが、これは、関委員などがお話をされているALTとか何かで、そういった効果が現れているという分析はできるんですか。

【事務局(上岡)】 英検の場合ですよ。その相関関係というのははっきり調査をしたことがないのでわからないんですけども、やはり小さいときから興味関心を持たせるとか、そういったものというのはやはり学習意欲につながっていくと思うので、そういったALTさんが来て、授業の中に入っていて、そしてコミュニケーションがとれるという環境が整備されているというのは、やはり全くない状況で日本人の先生がやっているのとは全く違うと思いますので、そういった成果はあるのではないかと個人的には思います。

【町長】 もう一つ質問なんです、生涯学習課が後ろのほうに控えているので、資料の中に中央公民館の夏休みのエンジョイ英会話きつと東館南集会所でも子どもふれあい教室などで英語活動と書いてありますけれども、どのぐらいの数をやっているんですか。

【事務局(星野課長)】 中央公民館ですと、実施回数でよろしいですよ。

【町長】 はい。実施回数はどのぐらいやっているの。

【事務局(星野課長)】 ですと、夏休み中に、これは29年度なんですけど、小学生を対象に2回、講師はALT……。

【町長】 それは小学生が別々にやっているんですか。

【事務局(上岡)】 では、私のほうで答えます。

今年度は、低学年、高学年、中学生ということで3部体制に分かれて、低学年が午前中、

高学年も午前中で、抱き合わせで午後が中学生ということで、全部で3部体制で行いました。低学年の参加人数が22名、高学年が16名、そして中学生が16名となっております。

【町長】 回数は。

【事務局(上岡)】 回数は1回ずつ。

【町長】 1回ですか。

【事務局(上岡)】 はい。

【町長】 それで、国のほうでは目標を設定しているようですが、実際、国のほうで示されている、5・6年生で週に2コマとか、3・4年生で週1コマとか出ていますけれど、どうなんでしょうか、成果、効果というのはかなり上がるように、現場としては実際思われますか。

【事務局(上岡)】 これですか、5・6年生とか3・4年生ですね。

【町長】 目標設定がされていますよね。その後の英語力に対する目標設定というのが、参考資料の別紙というのがそうでしょう。

【事務局(上岡)】 これは生徒の目標ですね。

【町長】 これが、例えばこの資料で示されている内容で、この目標が達成を現場ではどんなふうにお考えですか。

【事務局(上岡)】 なかなか、おそらく厳しいような気がします。英検3級程度以上ということで、実質、受験するお子さんとかのことを考えたり、それは強制でもないわけですね。あとは、はかる物差しとかが国で示されているわけではないので、今も3級程度の力がある子供はどのようなふうに見ているかということ、ある程度先生たちの見立てであったり、3級に合格していることを比較して、その子供たちをピックアップしているところではあるので。それでも、今、このような状況であるので、相当、今、委員さん方が検討していただいているように、英語の必要性とか、そういうのもって、先ほどから申し上げていますように意欲とか、子供たちがそういうのをやってみたい、勉強してしっかり身につけたいといったものを、きちんとエンジンをかけていかないと、国が、大人が求めている目標値に子供たちが追いついていくかということなかなか難しいところではあるので、どこかではそういった仕掛けづくりというか、今、仕掛けをつくっているところですが、子供たちにほんとうにそこまでおりているか、その必要性について、子供たちが、今、国がこういうふうになっているというところまでは、おそらく子供たち自身はわからないでい

るところだと思うので、そういった必要性を感じていかないと、両方の意欲と、学習するってすごく意欲が大切なので、そんなところと結びついていければ、さらに加速度を増して、子供たちにそういった力がついていくとは思いますが。

【町長】 実際、先ほど関委員のお話で、接客業の方もそうですけれども、英語が必須になっているというお話をいただきました。本町の場合はここに日産自動車がありますけど、本社の会議は全部英語になっていますから、当然、仕事が終わった後に英会話教室に通っているとか、皆さんそういう努力をして、今、会社でもそういうところが多くなっています。

そんなふうに、非常に英語が身近でなくてはならないものになっています。外国人がいろんなSNSで情報を発信して、普段我々日本人が行かないようなところを好んでというか、そういう所を見つけて観光客が来るような時代になってきて、そうすると、例えばその旅館の経営者、我々世代の人は、外国人のお客さんが来るので、必要に駆られて勉強するんですね。そういう環境にあれば、当然子供たちもそういうのを見ているから。先ほどのデパートの話もそうです。要は、実際、上三川町でも企業活動の中では英語を必要としていますけど、実際に上三川町で生活をしている人たちは英語を使う必要がない、環境が違うんだと思います。それは、都会だから、田舎だからというところでは関係なく、環境によって違うので、我々は、子供たちの環境をがらっと変えることはできないですから。何が言いたいかというと、このコマ数だけでは、そういった生活の環境の中では、やっぱり上三川町の場合は、もっと英語が頻繁に使われているところよりも、子供たちも英語に接する頻度は少ないんだというふうに思います。だからALTの配置、2名増加とか何とかとありましたけれども、いろんな活動の場に、そういった英語を用いるような、これは学校教育だけでなく、生涯学習課でやっている社会教育のほうもプラス、あとは普段の地域活動の中にもそんなものが織り込めて、みんなで、全町民が英語に対してもう少し接する頻度が高くなるような形になれば、こういったことも効果として現れてくるんじゃないかなと私は感じているんですが。これは、この話とはずれますけど、そういったところも教えていったほうがいいのかなと。

【教育長】 町長がおっしゃられたように、この目標に対して学校は追いつけるのかというご質問ですけれども、これを見てもみますと、今は50%ですけれども、36年度には3級程度の者は70%という設定をしています。これはよほど教育施策を改善、あるいは見直ししていかないと、この70%に追いつくというのは難しいのではないかと思います

ね。ですから、できるだけ英語を使うことに意欲を持つような、英語を使ってみよう、コミュニケーションしようという子供たちを育てていくことがまず必要なのかなということ。

それから、外国の方、英語でしゃべっている方がいたら、私なんか後ろに隠れてしまいますけれども、そうじゃなくて、ちょっと自分のほうから歩み寄っていくというような子を育てていくことが、将来的にはいろんなこととつながっていくのではないかと。そのためには、英語を学ぶ場、英語を活用する場、そういう環境を広げていく、学校教育だけでなく生涯学習、あるいは地域での活動、そういうような環境を整えていくのも大切なことなのかなと。私もこの表を見て、70%ってちょっとどうなのかなという気持ちは…

【町長】 この数字が結構高い目標設定なので、今は全国平均を上回っていますが、果たして文科省から示されているこのコマ数で、もっと今よりも数字が全国平均を上回っていて、この数字がクリアできるのかどうかというのが、先ほど伺ったんですね。

実際に幼稚園で英語に特化して教育しているというところも町内にあって、そこにお子さんを預けている親から聞いたんですけど、お父さん、全然発音が違うって子供に直された。子供同士が会話しているときはわからないと言ってました。子供が何を話しているかわからない。幼稚園に迎えに行くと、その幼稚園の中では英語ばかり話しているので、子供を迎えに行っても、全然、自分の子供が先生と話している会話がわからない。外国の先生と普通に話をしている。子供ってすごいなと思った。自分の英語力のなさを痛感したと言っていましたが、そういうふうに接する機会ですね、小さいうちから頻度を上げることが大切なんだろうねと思いました。

現状等は今の事務局の説明でご理解いただいて、ご意見とかいただいたんですけど、今後のスケジュールもあるんですか。これから、町のほうではこんなふうにしていく進め方というのはあるんですか。

【事務局(上岡)】 それでは、資料6に戻ってしまいますが、今、教育総務課で整えようとしているものについては、まず大きなゴールとしては、平成32年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて国と同じように進めていくという計画になっています。あとは、また新体制になったり、新学習指導要領が全面実施になっていくので、それに向けて先生方の研修であったり、小学校も教科化になるということなので、小学校の先生方は、実はもともと英語の免許は持っていない先生方が英語を教えるということになってきて、例えば、今回大きく変わる中では、6年生の、今まで、外国語活動の中では現在形だけ使

っていたんですけれども過去形が入ってきたり、あとは、先ほど関委員がおっしゃっていたように話すだけでは足りなかったのが、国のほうが書くこととか読むことを入れてきているので、そういったことについて、またさらに研修を深めていくことで子供たちの理解を助けていく必要があるのでは、先生方の研修にも力を入れて進めていっているところであります。

あとは小中の連携ですかね。そこで嫌いになってしまうとか、教科になって、小さいときには話すことが好きで英語が好きだったんだけど、途端に評価されたり、書くことができなくなってしまうことで、なぜかそこで英語が嫌いみたいになってしまうというデータも出てきているので、そういった段差をできるだけなくすような形で研修を進めているところでもあります。

あとは、生涯学習課ともいろいろなことについてはよく相談をしながら、そこは進めていきたいと思っているところではあります。

【町長】 現状を理解した上で、今後の進め方に関して、今、上岡先生から説明がありましたけど、皆さんどうですか。

【櫻井教育長職務代理】 A L Tの先生がかかわる授業というのは、例えば5年生の2コマであれば、その2コマは必ず一緒に入っているということでもいいんですか。

【事務局(上岡)】 町の計画のほうでは、できるだけそういうふうになるように、7人体制ということで組ませていただきましたので、5・6年生にも必ずつくということで進めています。

【櫻井教育長職務代理】 そうすると、小学校7校で、どこか2クラスということがあった場合に、英語の時間が2クラス同じ時間に、別々なのか、その辺のところはやりくりがあると思うんですが、A L Tの先生との会話の中で英語を覚えるというボリュームが大きいとすれば、学校の先生をA L Tの先生化するというか、難しいのかもしれないけど、先生にちょっと頑張ってもらって、A L Tの先生のような楽しい授業ができるように頑張ってもらえないといけないかなと。もしくは、A L Tの先生がもうちょっと増えればいいのか。

【事務局】 ありがとうございます。

【櫻井教育長職務代理】 楽しくないとやらないですよ。

【事務局】 そうですね。主に小学校のほうは、A L Tの先生はアシスタント、T 2という形で、主には学校の日本人の先生たちが主で頑張っているところで、そこで役割分

担をさせていただいて、ALTの先生が全部進めるのではなくて、ある程度小学生はオールイングリッシュだと全然わからない部分があるので、そんなところを補充しながら、担任の先生とALTの先生が役割分担しながら、生のほんとうに必要な部分を聞く部分についてもALTの先生にやっていただいたり、ルールとか、小学生だと順番が守れなかったり、児童指導の面なんかは担任のほうが得意ですので、そういったところは入っていただいたりということで、小学校もバランスをとりながら授業を進めていっているところであります。

【教育長】 基本的に、小学校ではALTの先生が外国語活動の時間にほぼ全て配置できている。2クラスあっても同時に英語の授業をやるということではなくて、1時間目、2時間目とかずらしながらやっていますし、1年生からALTの先生に加わっていただいて、これは5名から7名に増員していただいた結果、そのようなことが可能になったわけなんですけれども、その意味で全ての学年の子がALTによる授業を受けられるという環境が整ってきてありがたいかなと。

【関委員】 先生方は大変だろうかと、内心。専門で勉強してきたわけではないことが、文部科学省で決めたことで制度化されて、いきなり研修でやっていくとなったときに、プログラミングもそうで、先生たちは、できる能力がある方たちだというのはわかるんですけど、既存の、今までのいろんなものがあるじゃないですか。先生たちはパンクしないのかしら。どこか抜いていくところをある程度離すことも大事なときに、新たなものを入れるのであれば——私たちもそうじゃないですか、お金を使うときに、何でも買いたければ破産してしまうわけで、いろいろ入れてきたときに、子供たちも大変ですけど、先生たちとか、それを支える、研修を支える方たちのところも、これと話がずれるかもしれないですけど……。

【教育長】 ずれないですよ。

【関委員】 もし私がこれをしろと言われたときに、いや、どうなんだろうって。新しいことを入れ過ぎて、大事な子供たちのほんとうに見なくちゃいけないところをおろそかにしてはいけないというところもあって、そういったところの整理も必要であるんじゃないかなと。

【教育長】 非常に貴重なご意見いただいたんですけど、やはり今の教員というのは、昔はやらなかったことを学校に求められる。プログラミング教育にしても英語にしても、そういうものを背負いながらやっているものですから、今まで背負っていた荷を少しおろ

すということも必要なのかと。でも、おろせるものとおろせないものがあるので、やはり地域の皆さんに少しお手伝いをいただけるような部分はお手伝いを、ボランティアの方に協力いただいたり、あるいは行事を精選したり、活動を縮小したりということで、今までと同じことをやりつつ、プログラミングも進め、英語教育も進めということは難しいと思うので、その辺のところはやはり努力して精査していく必要はあると。

非常に貴重なご意見で、以前も働き方改革ということでお話いただきましたけれども、英語教育を進める上でもそれは必要なことではないかなと思います。

【町長】 吉田委員。

【吉田委員】 やはり先生の研修も必須なんですけど、地域で、外国でお仕事をされて、そういう方が、手があいたときにサポートに入ってもらいたくとか、そういうのもあったらいいですかね。先生の負担がそれで軽減されるのであれば、そういったところも利用できたらありがたいのかなと思います。

【町長】 教育の現場では、今、吉田委員がおっしゃったような、地域の方で英語が得意な方のお力をお借りしているということは、現場のほうでは導入は可能ですか。

【事務局】 そちらは、今ボランティアのほうも学校支援ボランティアということで集めたり、学校のご協力をいただいているので、そういうところでもまたご協力いただけると大変ありがたいと思っております。

【教育長】 既にご協力いただいている学校もあるようですよね。

【事務局】 はい。本郷北小学校は、これまでに研究指定もあったので、その流れをくんで地域の方がご協力をいただいているようなところがございます。

【町長】 大分皆様のご意見を伺っていたんですけど、まだほかにもございますか。

貴重なご意見をいただいておりますが、大丈夫ですか。

実際に先ほど教育長がお話しされていたように、英語が不得意な私なんかは外国人を見ると腰が引けて、すっと隠れるような、実際、そういう衝動に駆られるようなこともあります。話しかけられたらどうしようとどきどきしちゃう、実際そういうのはあるんだと思います。なので、先ほどの小さい子供たちが外国人の先生、ALTの先生と会話をしている、そういうふうな、外国人に対するコンプレックスとか、そういうのを小さいうちから取り除いてあげて、まず先ほどから話が出てきているように、会話ができればそれは楽しいですよ。文法から入るのではなくて、そういった接する機会もALTの先生が今7人ということですので、授業以外の中でも、できるだけ可能な限り子供たちと接する機会を

与えてあげられれば、より英語が身近になるのかなと思います。

先ほど来、目標が設定されていて、36年度に70%という目標をクリアするのは、今、専門の先生方のお話を伺っても、なかなかこの目標達成は厳しい。ただ、厳しいからといって何も手を打たないというわけにはいかないので、いろんな意味で、日常生活の中に英語が、今以上に取り入れられて、子供たちがそれに対して身近に感じられるような環境を大人が提供してやるのが必要なことだと思います。これは教育長部局だけでなく、町長部局のほうも一緒になってそんな機会を与えられるような環境を整備していくと。これからまたそういう部分も詰めていかなきゃならないのかなと、皆さんのお考え、お話を伺ってそんな感じがいたしました。

これから始まることですので、これからも委員の皆様にはご意見等いただくようにして、今日のところはこんな形で締めてよろしいでしょうか。

では、「本町での外国語教育について」ということで、事務局、そして委員さんから貴重なお話をいただいたので、それを踏まえて十分活用していただくようお願いいたします。

【事務局】 ありがとうございました。

【町長】 以上をもちまして閉会といたします。

ありがとうございました。

— 了 —